

趣味以上・副業未満―公共音楽研究ことはじめ―

等 松 春 夫

趣味以上・副業未満

クラシック音楽に関する文章を書くことが少なくない。「ご専門は西洋音楽史ですか」と尋ねられると「趣味以上・副業未満です」と答えている。そもそも防衛大学校で「政治外交史」や「戦争史」を講義する人間が「趣味以上・副業未満」であれ、なぜクラシック音楽に関わることになったのか。その経緯を、「本業」である国際政治史との関連も含めて振り返ってみたい。

音楽放蕩の日々 牛津篇

英国のある財団から非常にありがたい奨学金をいただき、一九九一―九七年、二〇代後半から三〇代前半にオックスフォードの大学院で学んだ。前半はオックスフォード、後半はロンドンで暮らした。若すぎず年すぎ良いタイミングであった。

オックスフォードで留学生生活を始めた頃、強い印象を受けたのは大学生活の隅々にまで音楽が浸透していることだった。オックスフォード大学には三八のカレッジがある。創立が一三世紀にまで遡る古色蒼然としたカレッジには、必ず英国国教会（アングリカン）の礼拝堂と付属合唱団があった。毎夕の礼拝では合唱団が聖歌を歌い、オルガン専攻の学生が荘重な調べを奏でる。プロ・アマを問わず室内楽や声楽のリサイタルも盛んである。ホリウエル・ミュージッ

ク・ルームは、一七四八年に建てられた英国初のコンサート専用ホールで、ヘンデルやハイドゥンとゆかりが深い。入学式や学位授与式が行われるシェルドニアン講堂にはしばしばオーケストラが来演し、町の劇場にはウェールズ・ナショナル・オペラやグラインドボーン・ツリーリング・オペラが巡演に来て高水準の舞台を見せる。名誉博士号を授与されたヴァイオリニストのアイザック・スターン（一九二〇～二〇〇一）がシェルドニアン講堂で開いた返礼リサイタルも聴いた。ハイドゥン（一七三二～一八〇九）も一七九一年に名誉博士号の返礼に交響曲第九番を自ら指揮し、同曲は現在《オックスフォード》交響曲と呼ばれている。

音楽放蕩の日々 倫敦篇

筆者の博士論文は「国際連盟の委任統治制度の特質を、日本の連盟脱退後の南洋群島委任統治継続に対する連盟と各国の反応を手掛かりに、明らかにする」というものであった。この制度の背景となった英国の植民地統治に関する資料や文献はオックスフォードのボードリアン図書館、ローズ・ハウス（セシル・ローズ財団）、クイーン・エリザベス・ハウス（帝国コモンウェルス研究所）に豊富にあった。しかし、一九二〇～四〇年代の資料を見るにはロンドンの国立公文書館（Public Record Office、略称P.R.O。現在はNational Archives）、大英図書館、東洋アフリカ研究学院（SOAS）や経済政治学院（LSE）等ロンドン大学の図書館へ行かねばならない。そこで、留学時代の後半はロンドン北郊ハムステッドの学生寮に住み、資料調査と論文執筆に勤しんだ。中にはP.R.Oや大英図書館の読書室で過ごし、夕方からはいそいそとサウスバンク・センターやバービカン・ホールやコヴェントガーデンへ向かった。

英国のコンサートホールや劇場では公演当日に学生証を示すと、驚くほど安価な学生券が入

手できる。「金はないが暇はある」若者を今のうちに捕まえ、将来給料を取る身分になったらフル・プライスのチケットを買ってでも来てくれる愛好家に育てるといふ深謀遠慮である。この特権を大いに活用して、七年間の留学期間中に六〇〇以上のコンサート、リサイタル、室内楽、オペラ、演劇に足を運び、放蕩の限りを尽くした。

中でも英国放送協会(BBC)が毎年夏に主催するプロムナード・コンサート(PROMS)に三シーズン続けてほぼ日参したことは、音楽と社会の関係を考える契機となった。PROMSは一八九五年に指揮者ヘンリー・ウッド(一八六九―一九四四)が、オーケストラ愛好者の裾野を広げることを目的に始めたコンサート・シリーズである。七月中旬から九月中旬までの八週間、ロンドンのケンジントンにあるロイヤル・アルバート・ホールを会場にして毎晩オーケストラ演奏会やオペラの演奏会形式上演が行われる。収容人数八〇〇〇名を誇る巨大なホールは、ヴィクトリア女王が早逝した夫君アルバート公の追善に一八七一年に建てさせた。PROMSでは広大な空間を利用して大規模な合唱を伴う作品が多く取り上げられる。九月半ばの楽日の演目には、パーセル、ヘンデル、パリイ、エルガー、ヴォーン・ウィリアムズ、ホルスト、ウォルトンなど英国を代表する作曲家たちの作品が並ぶ。トリの定番曲はエルガー(一八五七―一九三四)の行進曲《威風堂々》第一番に基づく《希望と栄光の国》とパリイ(一八四八―一九一八)の合唱曲《エルサレム》である。前者は全盛期の大英帝国讃歌、後者は第一次世界大戦の戦没者への鎮魂曲である。高価なボックス席から安い立見席までアルバート・ホールをぎっしりと埋めた八〇〇〇人の聴衆が、舞台上のオーケストラ、歌手、合唱団と共にこの二曲を高らかに歌い上げる。この模様はBBCが実況放映・放送して英国全土で数百万人が視聴する。いささか時代錯誤的ではあるが、これは社会階級や地域を超えた、帝国意識と国民意識を

再確認する儀礼ではないのか。

合唱といえば、留学時代に気付いたことは英国における合唱人口と合唱音楽祭の多さである。ロンドンには一八七六年創立のバツハ合唱団があり、かつてはヴォーン・ウィリアムズ（一八七二～一九五八）が音楽監督を務めた。地方都市でも合唱音楽は盛んで、①ウースター、②ヘレフォード、③グロースターの三都市が毎年七月に持ち回りで行うスリー・クワイヤーズ・フェスティバルは発足が一七一五年である。筆者は留学中に①②を、三年前の二〇一九年に③を聴いた。主会場は各市のアングリカン大聖堂で、目玉はヘンデル、ハイドン、メンデルスゾーン、エルガー、ウォルトンらの合唱付き管弦楽大作である。オーケストラや歌手はプロが招聘されるが、合唱は地域のアマチュアたちであり、その水準は非常に高い。音楽祭の運営は地元の人々が手弁当で行っている。多くの人々が集い、コンサートホールや大聖堂という広大な空間で演奏され歌われる音楽が、社会にまったく影響がないはずはない。このような音楽を「公共音楽」と呼んでもいいのではないか。英国社会には「公共音楽」が満ち溢れていた。

英国音楽なき国

「音楽なき国 *Dus Land ohne Musik*」とは、二〇世紀初頭にオスカー・A・H・シュミッツ（一八七三～一九三二）というドイツ人が英国を揶揄した言葉である。もちろん「音楽なき」とは誇張で、英国では音楽活動が盛んであった。産業革命以降、富と知性を有する上流中産階級の人々を中心に高級な芸術音楽が好まれ、ハイドン、ベートーヴェン、ウエーバー、メンデルスゾーン、ブルッフ、ドヴォルジャークらは英国の聴衆を想定した数多くの名曲を書いている。しかし、国際的な知名度のある作曲家は、一七世紀のヘンリー・パーセル（一六五九～

一六九五)以降の英国にはいかなかった。その意味で、さきの言葉を「作曲家なき国」と修正すればあなたがち間違いいではない。英国音楽がドイツ人たちにも一目置かれるようになるには、エルガーの《エニグマ変奏曲》の初演(一八九九年)を待たねばならない。

筆者が留学していた一九〇〇年代、一部の英国音楽愛好家は別として、日本のクラシック音楽ファンの間で英国の作曲家たちは十分に市民権を得ていなかった。せいぜいのところエルガーの《威風堂々》、ヴォーン・ウィリアムズの《グリーンズリーヴスによる幻想曲》、ホルストの《惑星》が定番であった。人気があったのは圧倒的にドイツ、フランス、ロシアの音楽か、イタリヤ・オペラであった。その頃の日本は「英国音楽なき国」だったのである。

かくいう筆者も留学前には特に英国音楽に親しんでいたわけではない。しかし七年間の留学中に日本ではなじみの薄い多くの英国作品に触れ、筆者は英国音楽の多彩な魅力に引き込まれていた。幸いなことに、二一世紀に入り日本の音楽家たちも英国音楽に目を向け始める。しかし、作品を解説する人間がなかなかみつからない。二〇〇四年に東京交響楽団がエルガーのオラトリオ《使徒たち》を演奏した際、筆者にプログラム解説執筆の依頼が来たのはこのような事情からである。キリストの受難と使徒たちの覚醒を描いた《使徒たち》は、演奏時間二時間を超えるドラマティックな大作で、一九〇三年にバーミンガムで初演された。一〇一年後の日本初演で解説を執筆するという榮譽に筆者はあずかった。以後、英国音楽の楽譜解説、演奏会プログラム、音楽雑誌の論説などの執筆依頼がしばしば来るようになった。留学時代に古書店で入手した楽譜や音楽研究書、大量の演奏会プログラムが大いに役立っている。

おわりに

このたび『政治と音楽』という研究論文集が刊行された⁽²⁾。十余年前に明治学院大学の半澤朝彦教授を中心に同名の研究会が作られ、その成果が結実したのである。筆者も「帝国のこだま―イギリス帝国の変容と公共音楽」という一章を執筆した。「公共音楽」と言えば、筆者は日文研の「戦争と鎮魂」プロジェクトのためにも「慰霊のしらべ―戦争と英国の公共音楽」という論考をまとめている。二度の世界大戦を中心に、戦没者の慰霊に英国で公共音楽がいかなる機能を果たしたかを考察した。遠からず活字になることを楽しみにしている。

(防衛大学校教授／国際日本文化研究センター客員教授)

註

- (1) 英文博士論文を基にした日本語による拙著は等松春夫『日本帝国と委任統治―南洋群島をめぐる国際政治 1914～1947』(名古屋大学出版会、二〇一一年)。原文のエッセンスは以下を参照。Haruo Tohmatsu, 'Japan's Retention of the South Seas Mandate, 1922-47,' in R.M. Douglas etc. ed, *Imperialism on Trial: International Oversight of Colonial Rule in Historical Perspective* (Lexington Books, 2006)
- (2) 半澤朝彦編『政治と音楽』(晃洋書房、二〇二二年)。なお、本稿で言及した事項の典拠は、同書所収の拙稿の註および文献目録を参照されたい。